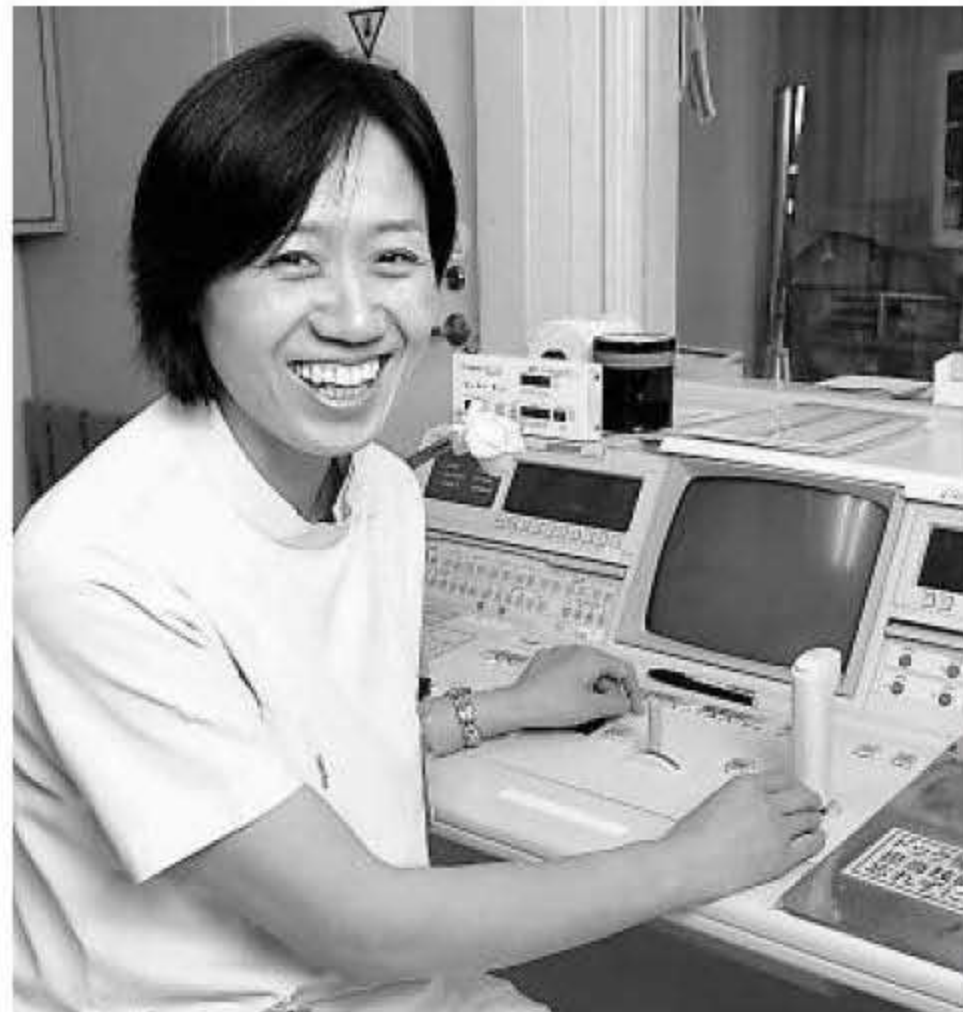


患者を
支える人々

① 胃や乳房のX線写真を撮影

② 的確な体位 わかりやすく説明



診療放射線技師 と富樫 せい子さん

東京都新宿区の財団法人東京都予防医学協会では、乳幼児から高齢者までを対象にした学校健診、住民健診、職域健診のほか、人間ドック、がん検診を受けられる。

胃X線検査とマンモグラフィ検査を担当する放射線部科長の富樫せい子さん(44)は診療放射線技師になって23年。01年に日本消化器がん検診学会の「胃がん検診専門技師」(全国に1838人)、03年にマンモグラフィ

検査精度管理中央委員会の「検診マンモグラフィ撮影認定診療放射線技師」(同約8千人)と2種類の認定資格を得た。

検査での役割は、胃や乳房などの異常の有無を正確に判断できるような質の高い写真を撮影すること。受診者への説明や立ち位置の指示、撮影などで高い技術が求められる。

胃X線検査では、炭酸ガスを出す発泡剤と高濃度造影剤のバリウムを受診者に飲んでもらう。ガスで胃を膨らませ、胃壁にバリウムを付着させ、炭酸ガスは黒く、バリウムは白く写るようにコントラストをつける。

受診者がバリウムを飲み終わって胃のぜん動運動が起こるまでの数分間に、様々な角度から写真を8枚撮らなければならない。

胃の形は人相と同じように少しずつ異なるが、受診者がスムーズに的確な体位を取れるよう、巧みな話術と撮影技術で誘導する。「受診者に気持ちよく帰ってもらいたいので、ゆっくり丁寧に、わかりやすく、にこやかに話すことを心がけています」

胃がんは胃壁の粘膜にできる。早期だと、ひだとひだの間の模様の乱れが写真に写る。検査時にげっぷをしたり、食物が胃に残っていたり、検査前のはこやガムで胃液の分泌が促進されたりすると、胃壁の凹凸が見えにくくなり、検査の効果が半減しかねない。受診者の自覚

が求められる。胃内視鏡検査で見えにくい部分も、胃X線検査でわかることもある。

東京都予防医学協会による領域検診で見つかった胃がんのうち、早期がんの割合は過去5年間で平均95・2%と非常に高い。富樫さんの経験では、検診間隔が長くなるほど、進行がんで見つかる確率が高いそうだ。

「異常を指摘されたのに精密検査を受けなかった受診者が、翌年、進行がんだったことも。『要精検』と言われたら、迷わず検査を受けてほしい」(医療ジャーナリスト・福原麻希)

64年生まれ。87年から東京都予防医学協会勤務。06年から現職。NPO法

人日本消化器がん検診精度管理評価機構・基準撮影法指導講師。

学協会勤務。06年から現職。NPO法

アスパラクラブのホームページに福原さんの取材記を掲載しています